様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５２０３９

研究課題名（和文）大衆演劇の「大衆性」――その現状に関する表象分析

研究課題名（英文）"Popularness" of Taishu Engeki: analysis of represetation on its present state

研究代表者
竹内　孝宏（Takeuchi, Takahiro）

青山学院大学・総合文化政策学部・教授

研究者番号：６０３０２８１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,200,000円、（間接経費）　360,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代の大衆演劇における「大衆性」の構造を解明することを目的としている。現在、大衆演劇のプログラムは、芝居ではなく舞踊ショーを中心として構成されている。そこで本研究は、まず、大衆演劇の代表的な劇場のひとつである浅草の木馬館をフィールドに、舞踊ショーで使用されている曲目の包括的な調査を実施し、つぎに、収集された約2400曲を統計的に分析し、その傾向や分布を多角的に考察した。さらに、こうして集められたデータは、それ自体が、「出し物」に関する体系的な情報に乏しい大衆演劇研究に対して貴重な資料体を提供することにもなるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study aims to reveal the structure of "popularness" in contemporary Taishu Engeki. Today, the program of Taishu Engeki is mainly composed not of the drama but of the dancing. Therefore, this study first conducted a comprehensive survey of the songs used in the dance segment in one of the most representative theaters, the Mokubakan at Asakusa. Second, this study statistically analyzed about 2400 songs collected, and examined their tendency and distribution. Morever, the data collected in this way also provides a precious corpus for the study of Taishu Engeki lacking systematic information about "contents."

研究分野：芸術学

科研費の分科・細目：表象文化論

キーワード：演劇　舞踊　大衆文化　歌謡曲　浅草　演歌　音楽　日本

１．研究開始当初の背景
（１）客観的背景：本研究が対象とする「大衆演劇」は、学術的背景というに値するほどの研究の厚みをこれまでもってはこなかった。ほとんど例外的な業績として、鵜飼正樹の『大衆演劇への旅』をあげることができるのみである。そのため本研究の位置づけも、「挑戦的」でありかつ「萌芽的」なものとならざるを得なかった。

（２）主観的背景：他方、報告者の学術的関心は、ここ数年は音楽史研究と演劇史研究と大衆文化研究が交錯する地点に強い固着を示す傾向がある。したがって本研究は、報告にとって、これまで蓄積してきた知見の数々を総合し、それによって新たな地平を切り開こうとするものでもあった。

２．研究の目的
本研究は、「大衆演劇」と呼ばれているジャンルの舞台表象に関して、その「大衆性」が現在の時点でいかなるパラダイムに依拠しているか、またいかなるパラダイムを要求しているかということを解明しようとするものである。そのさい、聞き取りや質問などの社会調査法的なアプローチとは異なり、むしろ表象分析の観点から、しかもいわゆる「舞踊ショー」で使用される楽曲の布置を直接的な対象とした。いま、大衆演劇の「大衆性」がもっとも鮮明に反映されているのは、観客の社会階層性や心性ではなく、ドラマの主題や構造ですらもなく、なにより舞踊ショー、とりわけその伴奏として使用される音楽においてではないかという仮説にもとづく方針である。

３．研究の方法
（１）前提条件：大衆演劇においては、研究のためのデータ収集に必要不可欠な網羅性と体系性を維持することが、きわめて困難である。本研究がその直接的な素材とする舞踊ショー使用曲に注目するならば、東京近郊の 4 劇場にフィールドを限定したとしてもなお、調査対象となる曲は 1 ヶ月あたりのべ約 2400 曲となる。また、劇場ではなく 1 つの劇団に「密着」しようとするなら、今度は 1 ヶ月ごとの移動を余儀なくされる。いずれにしても、研究どころか社会生活の大半が犠牲になるだろう。そこで本研究では、網羅性と体系性の確保はこれを断念し、その断念に見合うだけの一貫性を確保するために、調査地としての劇場を浅草の木馬館に固定した。木馬館は、大衆演劇を「代表」する劇場といわれる。そしてそれが単なる一般的な社会通念であるだけではなく、たしかにそれなりの根拠があるということは、記号学的にも社会学的にも証明可能である。したがって、木馬館だけをフィールドとしても一般性を損なうことはない。しかし、データに地域的な偏向が見られるかどうかを念のためチェックする目的で、否応なく短期間の断片的なものにならざるを得なかったが、東京における浅草にほぼ相当する大阪新世界の朝日劇場および浪速クラブでも同様の調査を実施した。

（２）年度ごとの重点
①平成 24 年度：データおよび関連資料の収集。浅草木馬館での上演を実地に調査し、そこで使用されている楽曲を逐次リストアップしておく作業が主体となった。なお、これは次年度の前半にまで継続されている。

②平成 25 年度：収集されたデータの分析と総合。前者については、適切なメタデータの設定にもとづく度数分布表の作成、また後者については、大衆演劇の外部領域において「大衆的支持」を示す指標や徴候との比較検討を中心的な作業とした。

４．研究成果
（１）概要
①調査期間：平成 24 年 4 月～平成 25 年 9 月

②劇団数：のべ 18 劇団

③劇団の地域性：東京 5／関西 8／九州 5

④調査回数：117 回

⑤収集したサンプル数：2434
　＊数値はデータクリーニング後のもの

⑥1 回あたりの平均サンプル数：20.8

（２）データの取り扱いに関する原則
①メタデータ：それぞれのデータに関して、歌手／曲名／作詞／作曲／発表年の 5 項目を設定する。

②「歌手」について：楽曲がカバーの場合であっても、実際的かつ技術的理由から、オリジナル歌唱者に置き換える。

③「不明」と「不詳」：事後的な調査によっても上記メタデータに対応する部分が判明シなかった場合は「不明」とし、「歌手」と「曲名」の両方が「不明」であった場合はリストから除外した。また、民謡や俗謡など、「作者性」が希薄な楽曲については「不詳」とし、これはリストから除外していない。

（３）集計結果と分析のポイント
①歌手（上位 10 人）

石川さゆり	115
美空ひばり	81
五木ひろし	77
島津亜矢	55
吉幾三	48

坂本冬美	43
杉良太郎	43
北島三郎	43
山本譲二	39
天童よしみ	30

石川さゆりがトップに位置するランキングは、管見ではほかに第一興商が 2011 年 4 月に発表した「昭和歌謡曲　カラオケランキング」くらいである。したがってこれは、ひとまず大衆演劇に固有の現象であり、大衆演劇の「大衆性」に接近するための重要な手がかりが、ここに示されていると考えてよいだろう。その一方で、この 10 名が、業界的な分類でいえばおおむね「演歌歌手」によって占められていることもまた一目瞭然であるが、しかし、「演歌」と「演歌歌手」の結合はいまや流動的である。いいかえれば、このデータを根拠に、大衆演劇と演歌の（だれもが抱くであろう）観念連合を（科学的に）証拠立てることはかならずしもできない。

②曲名（上位 10 曲）

転がる石	10
男の祭り酒	9
ひとり旅～りんご追分入り～	8
夜空	8
Ti Amo	7
お梶	7
炎	7
虎	7
酒供養	7
北酒場	7
夢街道	7
矢切の渡し	7

「歌手」の場合にも増して分散的な状況のなか、僅差ながらもっとも高い度数を示したのは《転がる石》であった。歌手は石川さゆりにほかならない。統計的には僅差とはいいながら、しかしこの結果には、心理的にどこか妙な説得力がある。実際この曲は、《ライク・ア・ローリング・ストーン》と《圭子の夢は夜ひらく》を強引にショートさせたような阿久悠の歌詞にしろ、民謡音階＝ロック音階を活用した杉本真人のアーシーな旋律にしろ、旅役者としての大衆演劇役者のメンタリティが好んで投影されるだけの資格は十分に備えているからである。また、それ以外に注目されるのは、ここにリストアップした曲の大半が、広義の「モビリティ」を主題としていることである。その点からしても、やはり不断の「モビリティ」とともにある大衆演劇の役者にとって、またそんな役者を追いかけまわる観客にとって、これらの曲目は「自分たちのうた」であるだろう。

③作詞（上位 10 名）

阿久悠	97
吉岡治	82
荒木とよひさ	78
星野哲郎	62
たかたかし	58
吉幾三	51
石本美由起	49
なかにし礼	40
松井由利夫	36
里村龍一	32

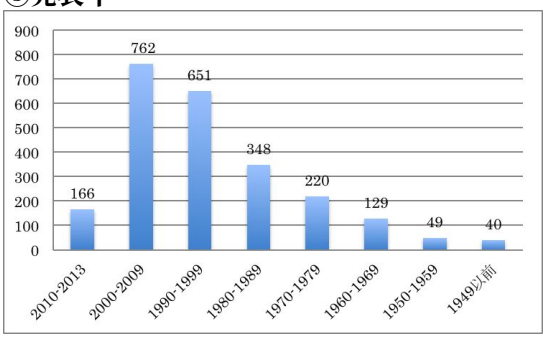
「作詞」については「歌手」の場合とほぼ同様の分布を示しており、ここに両者の（統計学的なというより音楽業界的な）相関性を観察することができる。すなわち、演歌系トップシンガーにヒット曲を提供する作詞家たち、ということである。そうしたなかで、表には示されていないが、「不詳」が 29 ポイントであったことには注目しておく必要があるだろう。つまり「作者不詳」の民謡や俗曲もまた、大衆演劇の「大衆性」を規定する重要なファクターであったということである。しかし、これもまた（演歌の場合の同様）「古さ」の概念で一括するわけにはいかない。舞踊ショーで実際に使用されている民謡や俗曲は、たとえば六三四のような和洋折衷ロックバンドが、宇崎竜童などとのコラボレーションを通じて録音した《田原坂》や《貝殻節》などでもあるからである。したがって大衆演劇は、「古さ」と「新しさ」の葛藤という視点から理解することが必要である。

④作曲（上位 10 名）

杉本真人	135
弦哲也	114
浜圭介	98
岡千秋	60
徳久広司	53
吉幾三	52
船村徹	46
三木たかし	45
遠藤実	41
市川昭介	33
堀内孝雄	33

今回の調査で、これがもっとも予想外の結果であった。杉本真人の 135 ポイントという数値は、「作曲」のなかの最大値であるだけではなく、設定したすべての項目をつうじて圧倒的な絶対値を示している。現代の大衆演劇を「音楽的」に代表するのは、杉本真人であるということなのだろうか。ここで杉本の作風を詳細に論じることはできないが、たとえば「②曲名」の表にあらわれている《転がる石》と《酒供養》（この 2 曲はいずれも石川さゆりに提供された）には、たしかに「ロック演歌」として一括りにできるような特徴がある。この杉本真人を除いて目を引くのは、いわば「純演歌」の作曲家たちであるが、杉本の場合ほどではないにしろ意外であったのは、三木たかしである。大衆演劇舞踊ショーの文脈でいえば、三木たかしとは、《北の螢》（森進一）や《夜桜お七》（坂本冬美）といった、いわゆる「テッパン曲」の作曲家であるが、同時にまた、劇団四季オリジナルミュージカルの作曲を担当しているのもやはり同じ三木たかしである。「劇伴」作曲家としての三木たかしのペルソナは、今後はこの 2 つの側面から把握しなおす必要があるだろう。

⑤発表年



便宜的に 10 年ごとの括りで様子を観察すると、90 年代とゼロ年代で全体の 60 パーセントほどを占めていることがわかる。10 年代については、まだ最初の 3 年 9 ヶ月ほどがカバーされているにすぎないが、このままのペースが持続すれば、最終的には 90 年代やゼロ年代とほぼ同様の水準に到達するものと考えてよいだろう。「大衆演劇における同時代性の浸透」とでもいうべき事態は、ここでもまた観察することができる。さらに、楽曲の発表年をオリジナルや「不詳」ではなくカバーバージョンを基準にするならば、グラフのピークがさらに左方に移動することも容易に予想される。大衆演劇と「古さ」の概念をショートされる、あるいは大衆演劇を「ガラケー」ならぬ「ガラゲー」（ガラパゴス芸能）として把握する思考の枠組みがいかに不適切であるかということは、これまでも指摘してきたところだが、この「発表年」という指標にもとづくデータは、その十分な裏付けをあたえてくれるだろう。

⑥歌手×曲目（上位 10 件）

石川さゆり	転がる石	10
石川さゆり	男の祭り酒	9
五木ひろし	夜空	8
美空ひばり	ひとり旅～りんご追分入り～	8
石川さゆり	酒供養	7
島津亜矢	お梶	7
杉良太郎	冬牡丹	6
山本譲二	花も嵐も	6
山本譲二	夢街道	6
美空ひばり	関東春雨傘	5
五木ひろし	裏通り	5

①～⑤の単純集計に対して、⑥では試験的にクロス集計を試みた。ここでは、最初に「歌手」を度数分布の高い純に抽出し、つぎに、そうして抽出された歌手のそれぞれについて「曲名」の分布を調べるという手順を踏んでいる。見られるとおり、有意差というよりは誤差の範囲に収まるほどの微妙な差異しか示されていないが、それでもなお、全体として、ある顕著な傾向性を指摘することは十分に可能である。すなわち、ここには、それぞれの歌手のいわゆる「代表曲」はほとんどリストアップされていない。逆にいえば、ランキングなり賞なりといった社会的評価とは無縁でありながら、しかし大衆演劇の文脈に置かれることではじめてその魅力を開示するとでもいうかのような「性格的」作品が、リストの大半を占めている。実際、これらのほとんどは、報告者の経験からするならば、なにより大衆演劇の芝居小屋でこそ、もっとも頻繁に耳にする曲である。そしていま、歌詞の内容に沿ってこれらの曲を解析するならば、たとえば旅、男と女、酒、落魄…といった特徴的なテーマの数々が浮上してくるだろう。おそらく、このあたりが、大衆演劇に固有の「大衆性」というものを言語化しようとするとき、もっとも重要な手がかりのひとつになるはずである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

竹内　孝宏、現代の大衆演劇における「大衆性」の構造――予備的考察、総合文化政策学紀要、査読有、通巻６号、2013、105-118

〔その他〕

竹内 孝宏、長谷川伸を読み直す、「ニッポニアニッポン～横浜・長谷川伸・瞼の母」公演プログラム、7-8（2014 年 5 月 30 日～6 月 8 日、神奈川芸術劇場）

６．研究組織
(1)研究代表者
竹内　孝宏（TAKEUCHI, Takahiro）
青山学院大学・総合文化政策学部・教授
研究者番号：６０３０２８１６